

学位論文題名

修辞理解の認知過程に関する研究：

名詞述語文の意味解釈を中心として

学位論文内容の要旨

本論文は、名詞述語文（“AはBである（A, Bは名詞）”形式の文、例えば、“鯨は哺乳類である”）のうちのあるものが時として隠喩としての解釈を受けられることがあること（例えば、“男は狼だ”）、また、名詞述語文の特殊形である同語反復文（“AはAである”形式の文）が、文字どおりにはなんら新しい情報を含んでいないにもかかわらず、ある種の意味（修辞的意味）を伝える表現として解釈されることがあること（例えば、“（しよせん、）子供は子供だ”）に着目し、それらの意味解釈がどのようになされるのかを認知心理学的に考究したものである。また、そのことを通して、人間の修辞理解過程の解明への手がかりを得ようとしたものである。

第I部では、名詞述語文に限定せず、より広く修辞的に理解される表現を対象として、それらの表現に共通する特徴を考察している。第1章では、約2600例の修辞的表現を対象として、それらが文字通りの意味で見て“会話の公準”のいずれかの下位原則から“逸脱”すると見なすことができるかどうかを検討している。その結果、全ての修辞的表現には何らかの意味での逸脱が認められること、また、その逸脱はすべての下位原則の各項目に多岐にわたって認められること、さらには、会話の公準以外の規範・規則性からの逸脱も認められること、そうした会話の公準以外の規範・規則性としては正書法と文体に関する規範、文脈内での表現の出現位置と頻度とに関する統計上の標準値などがあること、などを明らかにしている。また、修辞的解釈に関する従来の代表的理論であるGriceの論、さらにはSperberとWilsonの論の妥当ではない点の指摘を行っている。第2章では、第1章で検討された修辞的表現例のうちから57例を取り出し、それらを読んで受ける言葉の“あや（修辞性）”の印象を実験的に分析している。すなわち、被験者に修辞的表現を読ませ、50の形容語尺度上でそれ

らの修辭性を“一般的印象”と“技巧的印象”の二つの条件下で評定させた。そのデータをクラスター分析し、“あや”の印象が大きく知的・理性的側面と情動的側面とからなることを明らかにしている。

第Ⅱ部は、同語反復文に関する研究報告からなる。同語反復文の意味処理に関しては、文脈に依存して決まるとする説から、繰り返される単語の意味的性質を手がかりにして文脈とは無関係に算定できる場合があるとする説まである。第3章では、英語同語反復文に関するそうした議論を整理し、紹介している。第4章では、日本語同語反復文の意味解釈に関する従来の研究を概観し、それらがいずれも浅い考察に終わっていることを指摘した上で、日本語同語反復文が、繰り返される単語の意味的性質と文脈とによって、いくつかのパターンの意味に解釈されることを明らかにしている。また、一般に、日本語同語反復文は英語同語反復文ほどには文脈独立的に解釈されないこと、さらには、英語と日本語の同語反復文は、ともに基本的に、同一性(すべてのAは他のAと違わない)、独自性(Aは他(B)とは違う)、(カテゴリーAの顕著な属性の)不変性、の3種の潜在的意味をもつことを指摘している。第5章では、日本語同語反復文の“容認可能性”と“修辭性”が、反復語および文脈の違いによって変わるか、を実験的に考察している。すなわち、100人の被験者に、同語反復文を読ませその同語反復文を容認可能にする場面を文章化させた。そして、同時にもとの同語反復文を、より直接的な表現に言い換えさせた。さらに、同語反復文と言いかえ文双方に対する、自ら文章化した場面での“修辭性”を評定させた。実験結果から、同語反復文は、反復語と対極的意味関係にある単語を多く含む文脈であればあるほど有意味な発話として容認されやすいこと、また、一般に、反復語の否定的価値評価を導く文脈における方が、肯定的・中立的価値評価を導く文脈におけるよりも、解釈されやすいことを明らかにしている。

第Ⅲ部では、名詞述語文形式の隠喩文を中心に、隠喩文一般の理解過程を考察している。第6章では、隠喩文理解過程の“段階モデル”を紹介し、その妥当性を検証しようとした過去の実験的研究を概観し、隠喩的意味を計算する段階が“オプション”であるとする仮説に対し肯定的な解釈をもたらす実験結果と否定的な解釈をもたらす結果の両方を紹介している。その上で、こうした一見矛盾する結果の生じる理由について、各段階での処理の高速性のために、従来の実験反応測度の精度では段階性を捉えきれなかったためとする考察を展開し、段階モデルは妥当と結論づけている。第7章では、間接的発話行為として機能する文の理解過程の“段階モデル”を考察している。第8章では、段階モデルに則った二つの理論、すなわち、隠喩文理解の第三段階における隠喩的意

味を計算するメカニズムに関する Ortony と Glucksberg & Keysarの理論を比較検討し、その意味の妥当な計算のメカニズムを考察している。著者は、この章の議論において、Ortonyの理論の方が理解時に参照される知識源を相対的に明確に指定しており、現時点ではその分だけ優れた説明になっていることを論証している。第9章、第10章では、主語、述語の指示するカテゴリーのレベルの違いによって、隠喩文の理解しやすさや適切さが変わるかどうかを実験的に考察している。まず、第9章では、理解しやすさと適切さが、先行する文脈中の述語と関連する属性語に対するその述語の“関連性”の違い、隠喩文の“慣習性”の相違、述語の“カテゴリー・レベル”の違いによって影響を受けるかどうかを検討している。その結果は、Ortony の理論に矛盾せず説明し得るものであり、著者の第8章での議論を間接的に支持するものとなっている。第10章では、述語のカテゴリー・レベルを厳密に統制し、隠喩文の理解しやすさに及ぼす概念カテゴリーのレベルの効果を調べている。その結果、述語Bが“基本レベル (basic level)”にある場合の方が、下位レベルや上位レベルにある場合よりも理解しやすくなる傾向のあることを明らかにしている。

第IV部は本論文のまとめであり、同語反復文の解釈、隠喩的解釈、さらには文字どおりの解釈の関係について、より広い視野からの説明を試みている。第11章において、名詞述語文一般の意味解釈過程に関する包括的な考察を行い、その過程の概念的モデルを提案している。すなわち、名詞述語文の理解には、モジュール的で、適用順序にある部分（すべてではない）では段階性のある数個の手続きが適用されるとするモデルを提案している。そのモデルでは、それらの手続きごとに援用される知識源も特定している。さらに、そうした知識源の一つである語彙知識に関してはより詳細にその構造についてもモデル化しており、単語概念の間の結合リンクにタイプと方向と強さを仮定するネットワーク的モデルを提案している。そして、このモデルの提案によって、名詞述語文が時として“文字通り”に解釈されたり、隠喩的に解釈されたり、“うなぎ”文的に解釈されたりする過程の性質をよりよく説明できることを論述している。

# 学位論文審査の要旨

主査 教授 阿部純一  
副査 教授 植木迪子  
副査 助教授 瀧川哲夫  
副査 助教授 豊島正之

## 学位論文題名

修辞理解の認知過程に関する研究：

名詞述語文の意味解釈を中心として

本論文は、名詞述語文のうちのあるものが時として隠喩としての解釈を受けることがあること、また、名詞述語文の特殊形である同語反復文が、文字どおりにはなんら新しい情報を含んでいないにもかかわらず、ある種の意味（修辞的意味）を伝える表現として解釈されることがあることに着目し、それらの意味解釈がどのようになされるのかを認知心理学的に考究したものである。また、そのことを通して、人間の修辞理解過程の解明への手がかりを得ようとしたものである。

第Ⅰ部では、名詞述語文に限定せず、より広く修辞的に理解される表現を対象として、それらの表現に共通する特徴を考察している。第2章では、第1章で理論的に検討された修辞的表現例約2600例のうちから57例を取り出し、それらを読んで受ける言葉の“あや（修辞性）”の印象を実験的に分析しており、その結果から、“あや”の印象が大きく知的・理性的側面と情動的側面とからなることを明らかにしている。

第Ⅱ部は同語反復文に関する研究報告からなる。第3章では、英語同語反復文の意味解釈に関する従来議論を詳しく吟味し、問題をよく整理している。第4章では、日本語同語反復文の意味解釈に関する従来研究を批判的に概観した上で、日本語同語反復文が、繰り返される単語の意味的性質と文脈とによって、いくつかのパターンの意味に解釈されることを明らかにしている。また、日本語同語反復文と英語同語反復文との意味解釈における類似点と相違点について整理している。第5章では、日本語同語反復文の“容認可能性”と“修辞性”について実験的に考察し、その結果から、同語反復文は、反復語と対極的意味関係にある単語を多く含む文脈でより容認されやすくなること、また、一般に反復語の否定的価値評価を導く文脈においてより解釈されやすくな

ることを明らかにしている。

第Ⅲ部では、名詞述語文形式の隠喩文を中心に、隠喩文一般の理解過程を考察している。第6章では、隠喩理解過程の“段階モデル”を紹介し、その妥当性を検証しようとした実験的研究を概観し、隠喩的意味を計算する段階が“オプション”であるとする仮説に対し肯定的および否定的な結果の両方を紹介している。その上で、こうした一見矛盾する結果の生じる理由について、各段階での処理の高速性のために、従来の反応測度の精度では段階性を捉えきれなかったためとする考察を展開し、段階モデルは妥当と結論づけている。著者のこの考察は、従来の論争に対する現段階での検討としては最もよくなされたものと評価できる。第7章では、間接的発話行為として機能する文の理解過程の“段階モデル”を考察している。第8章では、段階モデルに則った従来の理論を比較検討し、意味計算の妥当なメカニズムを考察している。第9章、第10章では、主語、述語の指示するカテゴリーのレベルの違いによって、隠喩文の理解されやすさや適切さが変わるかどうかを実験的に考察している。まず、第9章では、理解されやすさと適切さが、述語の“関連性”、“慣習性”、“カテゴリー・レベル”の違いによって影響を受けるかどうかを検討しており、その結果から、間接的にではあるが、著者の第8章での議論の妥当性を明らかにしている。第10章では、隠喩文の理解されやすさに及ぼす概念カテゴリーのレベルの効果を調べ、述語Bが“基本レベル”にある場合により理解やすくなる傾向のあることを明らかにしている。

第Ⅳ部は本論文のまとめであり、同語反復文の解釈、隠喩的解釈、さらには文字どおりの解釈の関係について、より広い視野からの説明を試みている。第11章において、名詞述語文一般の意味解釈過程に関する包括的な考察を行い、その過程の概念的モデルを提案している。すなわち、名詞述語文の理解には、モジュール的で、適用順序にある部分（すべてではない）では段階性のある数個の手続きが適用されるとするモデルを提案している。そのモデルでは、それらの手続きごとに援用される知識源も特定している。さらに、そうした知識源の一つである語彙知識に関してはより詳細にその構造についてもモデル化しており、単語概念の間の結合リンクにタイプと方向と強さを仮定するネットワーク的モデルを提案している。著者は、このモデルの提案によって、名詞述語文が時として“文字通り”に解釈されたり、隠喩的に解釈されたり、“うなぎ”文的に解釈されたりする過程の性質をよりよく説明することに成功している。こうした試みは従来の研究にはなく、その問題の捉え方と具体的モデルの提案を高く評価できる。

以上の内容と評価により、審査委員会は本論文の著者佐山公一氏に博士（行動科学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。